

二〇一四年九月十三日 村田澤

【原文】

計唐時丁亥後又四十有六、前後中間甲申之歲是小甲申。兵病及火、更互爲災、未大水也。小水徧衝、年地稍甚。又五十五丁亥、前後中間有甲申之年、是大甲申。三災俱行、又大水蕩之也。凡大小甲申之至也、除凶民、度善人、善人爲種民、凶民爲混齋。

【訓讀】

計ふるに唐時の丁亥の後に又た四十有六、前後中間甲申の歳は是れ小甲申なり。兵病及び火、更も互ひに災を爲すも、未だ大水ならざるなり。小水徧く衝き、年地ごとに稍や甚だし。又た五十五丁亥、前後中間に甲申の年有り、是れ大甲申なり。三災俱に行ひ、又大水之を蕩するなり。凡そ大小甲申の至るや、凶民を除き、善人を度し、善人は種民と爲り、凶民は混齋と爲る。

【現代日本語譯】

數えると陶唐氏の時代の丁亥の後さらに四十六あり、その前後と中間の甲申の歳は小甲申である。戦争、疫病、及び旱魃が交互に災厄をもたらしたが、まだ大規模の洪水ではなかった。小規模の洪水があらゆる所に流れ、時代と場所によってはややひどかった。また五十五丁亥があり、前後と中間にある甲申の年は、大甲申である。三種の災いが一齊に起こり、さらに大規模の洪水が押し寄せる。およそ大小の甲申が巡ってくる、凶悪な民を取り除き、善良な人を救い、善良な人は種民となり、凶悪な民はぐちやぐちやに潰される。

【注釋】

計唐時丁亥……

『雲笈七籤』卷二劫運（中華書局二二）

（上清三天正法經）又云、……數極唐堯、是爲小劫一交。其中損益有二十四萬人應爲得者。自承唐之後、數四十六丁亥、前後中間甲申之年、乃小劫之會、人名應定。在此之際、陽九百六、二氣離合、吉凶交會、得過者特爲免哉。然甲申之後、其中壬辰之初、數有九周。至庚子之年、吉凶候見、其道審明。當有赤星見於東方、白彗干於月門。祿子續黨於蟲口、亂群填尸於越川。人啖其種、萬里絕煙、強臣稱霸、弱主蒙塵。其後當有五靈昂瑞、義合本根、龍精之後、續祚之君、平滅四虜、應符者隆、龍虎之世、三六乃清、民無橫命、祚無危患。自承唐乃後四十六丁亥、是三劫之周、又從數五十五丁亥至壬辰癸巳是也、則是大劫之周、天翻地覆、金玉化消、人淪山沒、六合冥一。天地之改運、非眞所如何。惟高上三天白簡青籙、乃得晏鴻翻而騰翔、飛

景霄而眇目耳。此玄和玉女口命、開金陽玉匱、論天地之成敗、吉凶之兆也。

『三洞珠囊』卷九劫數品（三葉裏、四葉表）

自承唐之後、數四十六丁亥、前後中間甲申之年、乃小劫之會、人名應定。：自唐之後四十六丁亥、是三劫之周。又從數五十五丁亥、至壬辰·癸巳是也、則是大劫之周。

『真誥』卷八甄命授第四注（中華書局一四〇）

唐承即列紀所云四十六丁亥之期。

同卷十七握真輔第一注（三一三）

自據去後、楊多有諸感通事。長史既恆念憶、故楊每及之也。世中多不愜信幽顯、所以不欲備說。爾來已經太元九年元嘉二十一年兩甲申矣、不知此所期謂在何時、謂丁亥數周之甲申乎。

年地

『太平經鈔』卷一（三葉裏五行）

災有重輕、罪福厚薄、年地既異、推移不同。

三災

『道教義樞』卷九（五葉表）

又三災義者、兵病水火也。本際經云、兵戈水火、毒疫災害。若陽九百六小劫之會、有此三災。又云、以刀兵爲劫、以大病爲劫、以水火爲劫。此則三災所起、三小劫末也。又云、一小劫末、具此三災。……

『道門經法相承次序』卷下（五葉表）

三災、一大旱、二大病、三大水。

後秦佛陀耶舍共竺佛念譯『長阿含經』卷二十二第四分世記經三中劫品（大正一、一四四上）

佛告比丘、有三中劫。何等爲三。一名刀兵劫、二名穀貴劫、三名疾疫劫。

後秦鳩摩羅什譯『大智度論』卷三十六釋習相應品（大正二五、三二七上）

如小劫盡時、刀兵疾疫飢餓、猶有人物鳥獸山河。大劫燒時、山河樹木乃至金剛地下大水亦盡、劫火既滅、持水之風亦滅、一切廓然、無有遺餘。

唐玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』卷第十二分別世品（大正二九、六五下）

論曰、從諸有情起虛誑語、諸惡業道後後轉增。故此洲人、壽量漸減、乃至極十小三災現。故諸災患、二法爲本、一耽美食、二性懶惰。此小三災、中劫末起。三災者、一刀兵、二疾疫、三飢饉。謂中劫末十歲時、人爲非法貪、染污相續、不平等愛、映蔽其心。邪法縈纏、瞋毒增上、相見便起猛利害心。如今獵師見野禽獸、隨手所執、皆成利刀、各逞兇狂、互相殘害。又中劫末十歲時人、由具如前諸過失故、非人吐毒、疾疫流行、遇輒命終、難可救療。又中劫末十歲時人、亦具如前諸過失故、天龍忿責、不降甘雨、由是世間久遭飢饉、既無支濟、多分命終。

『弘明集』卷十三王該日燭（大正五二、九〇上）

三災起而宮宇散、七證至而天祿絕。

善人

『論語』述而（七、八表）

子曰、聖人、吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣。曰、善人、吾不得而見之矣、得見有恆者、斯可矣。亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣。

種民

『登真隱訣』漢中入治朝靜法（輯校七三）

先東向云、甲貪生樂活、願從諸君丈人乞匄、長存久視、延年益壽、得爲種民、與天地相守。當使甲家災禍消滅、百病自愈、神明附身、心開意悟。

混齋

『太平經鈔』卷一（一葉裏一行）

六九乃周、周則大壞、天地混齋、人物糜潰。唯積善者免之、長爲種民。

同卷一（五葉表三行）

督進福業之人、不怠而精進、得成神眞、與帝合德。懈退陷惡、惡相日籍、充後齋混也。

同卷一（八葉表七行）

自是任闇、永與道乖、塗炭凶毒、煩惱混齋、大慈悲念、不可奈何、哀哉。

【原文】

未至少時、衆妖縱橫互起、疫毒衝其上、兵火繞其下、洪水出無定方、凶惡以次沈沒。此時十五年中遠至三十年内、歲灾劇、賢聖隱淪、大道神人更遣眞仙上士、出經行化、委曲導之、勸上勵下。從者爲種民、不從者沈沒、沈沒成混齋、凶惡皆蕩盡。種民上善十分餘一、中下善者天滅半餘。餘半滋長日興、須聖君明師大臣、於是降現。

【訓讀】

未だ至らざるの少時、衆妖は縱横に互ひに起き、疫毒は其の上を衝き、兵火は其の下を繞り、洪水は出るに定方無く、凶惡は次を以て沈沒す。此の時十五年中より遠く三十年内に至るまで、歲ごとに灾劇しく、賢聖は隱淪し、大道神人は更に眞仙上士を遣はし、經を出し化を行ひ、委曲に之を導き、上に勸め下を勵す。従ふ者は種民と爲り、従はざる者は沈沒し、沈沒して混齋と成り、凶惡は皆な蕩盡す。種民は上善は十分して一を餘し、中下善の者は天は半餘を滅ぼす。餘半は滋長して日びに興り、聖君明師大臣を須ち、是に於いて降現す。

【現代日本語譯】

まだそうなっていない少し前には、諸々の怪異が彼方此方で生じ、上では疫病が勢いよく廣まり、下では戦火に圍まれ、洪水はどこからでも押し寄せ、凶惡な人は順

に沈んでしまふ。この時、十五年間から長い場合は三十年間に、年々災厄が激化し、賢聖は身を潜めて現れず、大道の神人はまた真人・仙人・上士を遣わして、經典をこの世に示して教化を行い、微に入り細にわたって導き、上の者に言い聞かせ下の者を勵ます。それに従う者は種民となり、従わない者は沈み、沈んで潰れてしまい、凶惡な者は全て滅び去る。種民のうち上善の者とは十分して一を残した分で、中善・下善の者は天が半數を滅ぼす。残りの半數は成長して日ごとに盛んになり、聖なる君主・英明なる師・大いなる臣を待ち望み、そこでそれらが降臨してくる。

【注釋】

未至少時

『眞誥』卷十六闡幽微第二陶侃條注（二八三）

又別記云、陶公亡後少時、遣先奮死傳教、與其兒相傳云……

『太平經鈔』卷一（四葉裏五行）

不能深學太平之經、不能久行太平之事。太平少時、姓名不可定也。

衆妖

『抱朴子』內篇僊藥（校釋一九六）

又曰、中藥養性、下藥除病、能令毒蟲不加、猛獸不犯、惡氣不行、衆妖併辟。

疫毒

『神仙傳』卷六樊夫人（校釋二二五）

無早暎漂墊之害、無疫毒鷲暴之傷、歲歲大豐、遠近所仰。

『灌頂經』卷一灌頂七萬二千神王護比丘呪經（大正二一、四九五中）

佛告比丘、此十神王、護今現在及未來世諸比丘輩、不令五溫疫毒之所侵害、若爲虐鬼所持、呼十神王名號之時、虐鬼退散、自護汝身、亦當爲他說、使獲吉祥之福。

『灌頂經』卷九灌頂召五方龍王攝疫毒神呪上品經（大正二一、五二一上）

聞如是。一時佛遊王舍大城竹林精舍、與四部弟子眷屬圍遶、天龍八部悉來集會、佛爲說法、垂欲竟時、於是阿難從坐而起、齊整衣服、稽首佛足、長跪合掌而白佛言、維耶離國癘氣疾疫、猛盛赫赫、猶如熾火。中毒病者、頭痛寒熱、百節欲解。蘇者甚少、死者無數。世尊大慈愍加群生、願爲救護、使得蘇息。不遭苦患、病愈熱除。復爲說法、使得至道。

洪水

『尚書』堯典（二、一九裏）

帝曰、咨、四岳、湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵、浩浩滔天。

爲孔傳云、湯湯流貌、洪大、割害也、言大水方方爲害。蕩蕩、言水奔突有所滌除、懷包、襄上也、包山上陵、浩浩、盛大若漫天

隱淪

『雲笈七籤』卷四靈寶經目序（五一）
夫靈寶之文、始於龍漢。龍漢之前、莫之追記。延康長劫、混沌無期、道之隱淪、寶經不彰。

大道神人

『太平經鈔』卷五（四葉裏六行……五葉表九行）
道有九度分別、一名爲元氣無爲、二爲凝靖虛無、三爲度數分別可見、四爲神遊去而還反、五爲大道神與四時五行相類、六爲刺喜、七爲社謀、八（テキストファイルは「人」）爲洋神、九爲家先。一分爲九、九九八十一道。殊端異文、密用之則共爲一大根、以神爲使、以人爲門戶。……五爲大道神者、人神出乃與四時五行相類、青赤黃黑、俱同臟神、出入五行、神吏爲人使、可降諸邪也。

眞仙上士

『老子』四十一章（中華書局河上公章句一六三）

上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之、不笑不足以爲道。

『太平經鈔』卷二（十四葉表二）

神人言、積習近成、思善近生。夫道者、乃無極之經也。前古神人治之、以眞人爲臣、以治其民、故民不知上之有天子也、而以道自然無爲自治。其次眞人爲治、以仙人爲臣、不見其民、時將知有天子也、聞其教敕而尊其主也。其次仙人爲治、以道人爲臣、其治學微有刑、被法令彰也、而民心動而有畏懼、巧詐將生也。其次霸治不詳擇其臣、民多冤而亂生焉、去治漸遠、去亂漸近、不可復制也。是故思神致神、思眞致眞、思仙致仙、思道致道、思智致智。聖人之精思賢人、致賢人之神來祐之、思邪致愚人之鬼來惑之。人可思念皆有可致、在可思者優劣而已。故上士爲君乃思神眞、中士爲君乃心通而多智、下士爲君無可能思、隨命可爲。

同卷七（二十六葉表三）

五方者謂大深。上士見之、自得其意、以一承萬、得之恐其大喜也。小人得之、或妄語也。故不悉露見、使各思其意。上士且自以一承萬、通知其意。中士亦且綝綝幾知之。下士得之、反妄語也。是故纔成慮、小舉其綱、見其事以示凡人、使思其意、則可上下通達而無過。故上士治樂、以作無爲、以度世、中士治樂、乃以和樂俗人、以調治、下士治樂、纔以樂人、以召食。

出經

『出三藏記集』卷六道安大十二門經序（大正五五、四六中）

世高出經、貴本不飾、天竺古文、文通尚質。倉卒尋之、時有不達。

『九眞中經』

二人各共對齋二十四日、又告齋前後各一日、日訖出經、以付弟子。

『雲笈七籤』卷四靈寶經目序（五二）

但經始興、未盡顯行、十部舊目、出者三分。

行化

北魏吉迦夜共曇曜譯『雜寶藏經』卷七波斯匿王遣人請佛由爲王使生天緣（大正四、四八二下）

昔舍衛國、波斯匿王作是言曰、須達長者、尚能勸化一切人民、作諸福業、我今亦當爲衆生故、教導乞索、令其得福。於是行化、處處乞索。

慧皎『高僧傳』卷五僧先傳附傳道護（大正五〇、三五五上）

又有沙門道護、亦冀州人。貞節有慧解、亦隱飛龍山。與安等相遇、乃共言曰、居靖離俗、每欲匡正大法、豈可獨步山門、使法輪輟軫。宜各隨力所被、以報佛恩。衆僉曰善、遂各行化。後不知所終。

『太平經鈔』卷七（四十葉表三行）

三光上著天、各從其類、合而爲形、天之爲形、比若明鏡、皆若人有而目、洞照不欲污辱也、常欲得鮮明。帝王將興、皆得師道、人愛其榮、智以化其民、師之所貴、爲能知天心意象而行化。

委曲

『抱朴子』內篇道意（一七四）

余所以委曲論之、寬弟子轉相教授、布滿江表、動有千許、不覺寬法之薄、不足遵承而守之、冀得度世、故欲令人覺此而悟其滯迷耳。

蕩盡

『三國志』蜀書劉焉傳（八六七）

時焉被天火燒城、車具蕩盡、延及民家。

失譯『雜譬喻經』（大正四、五〇二下）

我是某國中人也。家先奉佛、供養衆僧。值世荒亂、流離至此、室家蕩盡、一身孤獨。依附此國大長者家、給其使令、仰其衣食、空身寄命、了無一錢。

上善 中下善

『老子』八章（二八）

上善若水、水善利萬物而不爭、處衆人之所惡、故幾於道。

『太平經鈔』卷六（八葉裏二）

上士求天報、中士求人報、下愚不施、反求報。上善之人得天報者度也。中善之人得人報、故愛利之而仕之。下愚無功而強報、故天地人共惡而誅之。

同卷八（十五葉裏八行）

人生必因天氣。上善者付天、中善付於人、下善付田畝。故上士學而度世、中士當理民、下士當理田野。上士當來雲氣、中士乘車、下士當步行。此三人各殊職、不相妨害。上士度世、上天爲中、和調風雨、中士屬縣官、當理人、下士當理財產。各有所職、不相妨矣。

滋長

『左傳』昭公十年（四五、一三裏、會箋二三）
義、利之本也。蘊利生孽、姑使無蘊乎。可以滋長。

須聖君明師大臣

『荀子』富國（集解一八四）

若夫兼而覆之、兼而愛之、兼而制之、歲雖凶敗水旱、使百姓無凍餒之患、則是聖君賢相之事也。

『抱朴子』內篇論仙（校釋一七）

況乎求仙、事之難者、爲之者何必皆成哉。彼二君兩臣、自可求而不得、或始勤而終怠、或不遭乎明師、又何足以定天下之無仙乎。

『論語』先進（十一、九表）

季子然問、仲由、冉求、可謂大臣與。

『太平經鈔』卷一（一葉表五行）

明師難遭、良時易過。不勝喁喁、願欲請聞。愚闇冒昧、過厚懼深。

同卷一（五葉表五行）

至士高士、智慧明達、了然無疑、勤加精進、存習帝訓、憶識大神、君之輔相皆無敢忘、聖君明輔、靈官祐人、自得不死、永爲種民、升爲仙真之官、遂登後聖之位矣。

同卷一（一葉裏三行）

種民智識、尚有差降、未同浹一、猶須師君。君聖師明、教化不死、積鍊成聖、故號種民。種民、聖賢長生之類也。

同卷二（四葉裏九行）

日象人君、月象大臣、星象百官、衆賢共照、萬物和生。

同卷四（九葉裏五行）

古者聖帝明王重大臣、愛處士、利人民、不害傷、臣亦忠信、不欺君。